
東方改造論

床の間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方改造論

【Nコード】

N3655S

【作者名】

床の間

【あらすじ】

東方に毛並みの違うヤツを入れてみたかったんだ。

仮面ライダーとか

最初（前書き）

勝手に東方。

キャラ崩壊、世界観のブレ、中2設定酷いです。悪しからず。

長くなる事が多くなると思います。

良ければお付き合い下さい。

転生系なので、苦手な方はお勧め出来ません。

最初

朝起きる。

歯を磨く。

飯を食べる。

いつも通り。

果たして全人類がそうであると言えるものなのか知り得る術は無いが、彼が辿って来た毎日は酷く平凡なそれだった。

彼は学生で、学年が上がって間もない時期だった。

身長も体重も特筆すべき点は無く、強いて言えば少しお喋りが過ぎる性格をしている。

その事が祟り、幾らか人生で損をする事も多々あった。

しかし彼は、これまでの人生の中で損と呼んで来た事を全て経験、得とする事を今し方決定した。

理由はとてつもなく単純な事なのだが、

「あ」

正直な所、もつと気の利いたセリフが言えなかったものかと彼は後で思ったという。

実際平凡で普通極まりない彼が、頭上から迫る鉄骨を発見して言えたセリフなど、たかが知れているのだが。

彼は自分で経験した事しか信用しないタイプの人間だったが、その瞬間に『走馬灯』という単語は信憑性バツグンになった。

幼稚園の駆けっこ大会でビリになった事、ドッジボールでボールを顔面に受け、鼻が若干低くなった事、体力テストで懸垂が1回も出来なかった事――あれ？俺に運動神経が無い事しか分からなくね？とか刹那の間に考えた後、彼の意識はブラックアウトした。

目が覚めた時、彼は目が覚めたのか良く分からなかった。
意味不明な表現だが、そうだから仕方が無い。

上下左右、辺りが真っ暗なのでは瞼を閉じているのと変わらないのだから。

「ここどこだ？」

思わず彼は呟いた。

話す相手は誰もいなかったが、喋っているだけで少し気が紛れた。
勿論彼も会話をするつもりは無かったし、声が返ってくる事も期待してなかった。

「何処だろうか」

が、予想外。
声返ってきた。

声が返ってくると同時に、今まで黒1色だった景色に色が帰ってきた。
ぼんやりとおぼろげだが、濁ったような白い球体が彼の目の前に浮

かぶ。

声はそれから発されているようだった。

「俺が聞いてるんだけど」

「それは君が先に聞いただけの噺だ。此処が何処だか誰にも判らない」

球体はくるくると廻っている。

この球体とこのまま問答しても事態は進展しなさそうなので、彼は質問を変えた。

「アンタは何？」

「何だろうか」

若干イラッとした。

イライラを鎮めるため、彼は状況を整理してみた。

朝起きる。

歯を磨く。

飯を食べる。

走馬灯を見る。

鉄骨に当たる。

あ、俺死んだ？

「俺は死んだのだろうか」

「君は辿り着いた」

何だこの白玉団子ぶち殺したるか。

詩的な言い回しばかり披露する球体に憤慨しつつある彼をよそに、球体は話し続ける。
言葉に感情は無い。

「辿り着いた。此方に。恒河紗の結果を乗り越え、此方に彼方から辿り着けた」

「ちょ、何言ってるか全然分かんない」

「君が解る必要性は無い。此から君の可能性を試す。不安定な世界へ送る。君の想像力が最大限に発揮される世界へ」

早口でまくし立てるように球体が話すため、彼は半分も言葉を聞き取っていない。

しかも真面目に全て聞き取ったとしても、文学的なセンスが皆無な彼には意味は理解出来なかっただろう。

「此から送る。君の『強さ』を示して欲しい」

その言葉を最後に、球体はその体を徐々に膨らませ始める。

彼は抗議しようとしたが、何故か口は言うことを聞いてくれなかった。

既に直径は2倍、4倍……と数えている間に、もはや元々周りは白かったのか黒かったのか良く分からなくなった時、彼は2度目のブラックアウトを体験した。

最初（後書き）

お疲れ様でした。

森林（前書き）

2つ目です。急に長くなりました。

ちまちま読んでみて下さい。

森林

眩しい。

瞼の裏からでも分かる。

日の光だ。これは日の光。

ゆっくりと彼は瞼を持ち上げた。

目が本来の機能を取り戻すと、じわじわと失われていた五感が戻って来た。

聴覚は鳥のさえずりを捉え、視覚はそびえ立つ木々を感知する。

鼻を満たす土の香りに、カサカサとした触感が手に伝わる。

「森？」

彼はおもむろに上体を起こし、辺りを見回した。

うむ。森だ。

「服…は着てるけど携帯…は持っていない」

ここはどこだろう。

あの白い球体は何と言っていたか？

『此から送る。君の強さを示して欲しい』

強さ？

強さを示すって何だ。

筋トレでもするのか。

思いついたら取り敢えず行動してみる彼は、その場で腕立てを始めた。

森のド真ん中で筋トレをする彼は誰の目から見ても間抜けだろう。

暫く彼の荒い息の音が続く。

「……も、無理」

土の上に大の字になった彼の弱音も、木に染み入るように消えていった。

額には珠の汗が浮かび、それで短い髪の毛も湿っている。

疲労困憊な状態で、彼は以前見たSF映画の事を思い出していた。地球から遠く離れた星に拉致され、そのまま延々と宇宙人と戦闘させられ続けるのだ。

「…もっぺん死ぬのは嫌だなア」

と、何か聞こえた。

鳥のさえずりのような心地よい歌声ではなく、舌を巻いたような、喉を鳴らすような音が……

キョロキョロと辺りに忙しく首を振ると、木の葉が不自然にガサガサと揺れた。

こんなシーンは映画で見た。

確かこの後、エイリアンにプラズマ砲で胸に風穴を空けられてしまふのだ。

「普通なら相手の正体を確かめに行く所だが…俺はそんな馬鹿なマネはしない！」

うははははははーっ！と変なテンションで笑いながら木々を突っ切る。

脚の速さには全く自信が無い。

無い、が、何故だか割と速い。

全力で走ってもあまり疲れないし、これならかなり走っていられるだろう。

しかし『エイリアン』もピッタリ着いて来ており、木々はガサガサ

ギシギシと揺らいでいた。

それどころか、少しずつ音が近づいて来ているような気がする。

「チツ！加速装置でも使ってるのか畜生！」

悪態をつく彼の背に、ドンと衝撃が走った。

そのままつのめってバランスを崩し、顔から着地。
母なる大地で口の中がジャリジャリする。

土を払って顔を上げると、生臭い風が顔を撫でた。

魚？いや…何か鉄臭…

にちゃ、と何かが彼の手に落ちる。

粘っこい液体のようだ。

「どう見ても血です本当に有り難うござい（ry」

彼が少し顔を上げると、愉快的な頭部が待ち構えていた。

犬のような顔だが、耳が無く、たてがみのようにゴムチューブのような管が首筋から伸びていた。

体は毛むくじやらで、ボディビルダーのように屈強な姿をしていた。

暫くにらめっこ。

痺れを切らしたのは化物の方だった。

管を下品に揺らしながら、大口を開けて彼に飛びかかる。

「ぎょわぁー！！死ぬ！！」

頭上からの攻撃を、頭を下げた回避する。

ガチャン、と歯が噛み合わさる音が彼の真上で響いた。

何も口内に入らなかった事を不思議がるように、化物は空の口で咀嚼する。

そして再び彼に迫った。

しかし既に彼は走り出しており、化物の追撃も空を裂いた。

走りながら彼は考える。

（逃げられねえ、となると、倒すしかねーじゃねえか！無理だろ！！

あれ何男だよ！)

自問自答している間にも化物は迫ってくる。

答えは簡単なのに。

方法が思い浮かばない。

倒したいが、自分は強くない。

強くない。

強ければ。

(強ければ……ッ！！)

化物の牙が彼の喉元を捉えた。

化物は歡喜に喉を鳴らし、牙に一層の力を込めて獲物を噛み砕こうとする。

が。

化物は驚愕した。

噛み砕けない。

それどころか、牙が通ってすらいない。

化物は渾身の力で獲物の首をへし折ろうとするも、ギヤリギヤリと

牙が滑る音だけが続く。

彼の体は変化していた。

首筋を包んでいた肌色の皮膚は金属のに変わり、化物の凶牙を阻んでいた。

（なんだこれ。何が起こつ……）

痛み。

毛穴のひとつひとつに深く針を突き立てられたかのような、鋭く深い痛み。

彼の全ての内臓が急速に膨張する。その感覚に呼吸が出来なくなる。

身体の外と内からの激痛に苛まれ、彼の意識は朦朧となる。

と、その痛みがいきなり消失した。

唐突に視界がクリアになる。

視覚の回復などではなかった。

――見えすぎていた。

言葉では表現出来ない感覚だった。

全てが、同時に、見える。

後ろにいる化物の不安げな顔も、揺れる木の葉も、辺りを舞う土煙の粒ひとつひとつも、それと、木に乗ってこちらを観察している何匹かの化物も。

彼は、動けなかった。

轟々と流れ込む情報を処理しきれず、彼の脳が悲鳴を上げていた。

そんな彼の事情はお構いなしに、化物はとうとう行動を始めた。

獲物の咀嚼を中断し、鋭い鉤爪で彼の胸部を貫こうとする。

しかし、それも阻まれた。

彼の意味とは別に、鉤爪の攻撃は、単純に物質としての強度で彼に敗北したのだ。

彼の変化は、首筋だけに留まらなかった。

服装は黒いライダースーツに変わり、その上から装甲が胸部から腹部にかけて取り付けられている。

両手は素材の判らない分厚いグローブに包まれ、両足も同じようになっている。

1番変化が訪れたのは、その顔だった。

ヘルメットのような仮面が彼の顔面を保護しており、表情は一切伺えない。

赤色の複眼、長く伸びた触角、尖った牙。

深緑の仮面を被った彼は、それ程までに変化が起きていようと、それを確認する術は無かったのだが。

「痛ッてえ！」

痛みに対する条件反射だろうか。

彼は振り向かずに、腕を振り回すようにして背後の化物を振り払った。

振り払った、というのは間違いかもしれない。

彼のグローブが腹部に触れた化物は、体をくの字に折り曲げて背後の木に叩きつけられた。

サッカーゴールがボールを迎えたように、木もギシギシと軋む。

木に突き刺さったまま、化け物は動かなくなった。

絶命か気絶か、彼に確認する事はできない。

「あら？何がどうなった？」

化物が沈黙して少し間をおき、彼は振り返る。
すると前述の通りの光景。

自分がやった事だと分かるのに何秒かかった。

赤色の複眼も間抜けにキョロキョロしている。

「まあいいや。今の内に逃げよう」

奇怪な姿のまま逃亡を図る。

彼が駆け出したと同時に、木の陰から数匹の化物が飛び出して来た。
同胞を倒された恨みか、単純な狩猟本能か。

ともかく勢いのこもった爪、牙を彼に突き立てんと突進して来る。

「ちょ、せめて1人ずつ！」

理解不能な言語を発しながら、犬頭の化物の1頭が彼に体当たりを決めた。

彼は衝撃から身を守るため両手で胸部を庇う。

すると意外、吹き飛んだのは化物の方だった。

自身の突進力を跳ね返され、後方に尻餅をついている。

まるで硬い壁にぶつかったようだった。

一方、彼の体に異変は無い。

手のひらを見つめてその事を彼が確認していると、他の3匹が彼に別々の攻撃を仕掛けた。

1匹は頭上から鉤爪を振り下ろし、1匹は脚に組み付こうと低く迫り、1匹は腕に噛みつくようとして来る。

「おわっ！！」

彼はその内腕に迫る1匹の首を掴み、下方の化物に叩き付ける。

それだけの行動で地面がビリビリ揺れ、化物達は土に体を半分埋めた。

最後の1匹は未だに頭上に迫っているが、彼は無我夢中で拳を放つ。拳は化物の腹部に直撃、重力に抗うように少し上昇し、そのままの姿勢で地に伏した。

「はあ、はあ、終わった…俺強し」

グツとガッツポーズをとり、勝利の余韻に浸ってみる。
すると彼の視界に、分厚いグローブが踏み込んできた。

「どうなってるんだ…コレ。鏡とか無いかな」

現在自分がどうなっているか確認するため、キョロキョロと辺りを見回す。

勿論森に鏡などあるはずもなく、彼は代わりに水を探す事にした。

鏡代わりという理由もあるが、単純に喉が渴いているのもある。

少し集中すると、鳥の声や木のさざめきに混じり、水が流れる音が微かに聞こえた。

どうやら視覚に加え、聴覚も強化されているらしい。

それから彼は、音のする方向にひたすら歩いた。
決して短い距離ではなかったけれども、強化されている彼には酷ではなかった。

歩いて歩いて歩いた時、それまで続いていた道無き道が途切れた。
一層日光が目差し、思わず彼は目を庇う。
すると、日を反射する流水がそこにあった。

木々を隔てるように流れる川で、幅は結構あるようだ。
所々苔の生えた岩が水面から顔を出しており、光る水面に影を作っていた。

「水だあああああ！」

いやっほう！と彼は川に飛び込むとした。
飛び込むとした、というのは、実際に飛び込む事は出来なかったためである。

「ぐボボっ！？」

彼の体は水に包まれている。
いるものの、彼は川に入っていない。

川から持ち上がった水が、彼の全身に纏わりついているためである。
完全に重力を無視した動き。

彼の脳は酸素より説明を欲していた。

「ガぼッ、ぐぼ、ボエ（なんだこれ）」

透き通った水の中で、彼は脱出法を必死に模索した。
すると目の前の岩、川から突き出した大きめな岩の上に、誰かが座っている。

輪郭はぼやけているが、確かに人だった。一繋ぎのワンピースのよ
うな青い服に、緑色の帽子を被っている。
風に乗って揺れる髪は碧だった。

（や、バイ。死、ぬ……ッ！！）

このままだと死ぬ。

回避するためには、水を体から弾かなければならない。

彼は洗濯機をイメージした。

遠心力で、外側に水を追いやるような――

（回転、だ！）

ぐるん、と身体を反転させた。

その動きで身体を包む水が揺らぐ。
ぐるん。

更に水が揺らいだ。

回転が増すにつれ、速度も上がっていった。

水の塊は徐々に膨らみ、風船のようにパンパンになる。

「おおおらあッ!!」

バシャン!と水が弾けた。

彼は飛び散る水滴の中に踊り出し、岩の上の人物へ飛びかかった。

ひつ、とその人物が小さく声を漏らす。

彼はその上に馬乗りになつて拳を振りかぶった。

その勢いで相手の緑色の帽子が落ちる。

怯えている青い瞳。

整った顔立ちに白い肌。

服を強引に隆起させる2つのカタマリは、スタイルの良さを想像させる。

「お…女？」

彼は振りかぶった拳を開く。

構えを解いた瞬間、少女は彼の下から這い出し、一目散に逃げ出した。

慌てて彼は彼女の手を掴む。

「ちょ、おい、待て！」

「わわわ、ごめんなさいごめんなさい！急に飛びかかって来たからビックリしてつい！」

「ついってお前が今のやったのか——っておいおい暴れんな！落ちっ落ち落ちる！」

両手をブンブン振って半狂乱気味に懺悔する少女のせいで、彼も上体がガクガクしている。

只でさえ狭い岩の上に2人も乗り、しかも苔で滑りやすくなっているので、バランスを保つのすら難しいのだ。

そんな中で体を揺すられればどうなるかは、少し考えれば分かる。

「あ」

落ちた。

深さはそれ程無いものの、流れがやや急なので、2人は一塊になって川を流れていった。

「ブクブクブクブクぶはあっ！お前何とかしろ！」

「て言うか、何で私の姿が見えるの！？もしかして迷彩故障した！？」

「おまつ、ちょ、前前前！」

「え？」

彼が指を指した先には、何も無かった。
川はそこで途切れている。
そこまで行けば、流れるのは終わりだ。
あとは落ちるのみなだから。

「――んお」

彼は目を覚ました。

右手、左手、動く。

右足、左足、良好。

あれ？元の体に戻ってる？

それから、仰向けになっていた体を起こした。

首を横に向けると、骨が伸びてボキボキと鳴った。

彼はベッドに寝かされていた。

勿論室内で、目分量で12畳くらいの部屋だった。

全て木材で建築されているにも関わらず、そこかしこにラジオやテレビや良く分からない機械が溢れている。

窓はあるが出入口は1つで、そこからベッドまで小さな水溜まりが点々と続いていた。

「意識を失っている間に運ばれたのか」

運んでくれたのは誰だろうか。
やっぱりあの水女だろうか。

「あ、起きた？」

噂をすれば、水女が現れた。
布で髪を拭きながら、ゆっくり歩いてくる。

「ってわー！誰！？」

「貴様！人を滝壺に叩き込んでおいて！」

「あれはやろうとしてやったんじゃない……じゃあ、あの妖怪？」

誰が妖怪だ！と彼は憤る。

確かに変な格好だったな、と少し思ったが。

水女は彼の顔を不思議げに眺める。

顔立ちまで変わっていたのだろうか、と彼は自分の顔を触ってみた。

「いや、変な仮面被ってたからさ。とにかく、無事で良かったよ」

「仮面？」

「うん。何かこう…虫みたいな」

彼女の言葉で一層心配になってきた。

あの時俺はどんな顔面、いや頭部をしていたんだろう？

彼はあの時の事を思い出す。

犬頭の化物に襲われた時、強さを欲した。

漠然としたイメージだったが、頭の中で自分なりの強さを思い浮かべて、気付いたらあの姿だった。

ならばもう1度。

（強くなれ）

全身がチリチリと熱くなる。

あの時と同じだ。

（強く）

目の前を光が包んだ。

「何なの？それって能力？」

水女は首を傾げていた。

反応から見て、彼は変化が終了した事を悟った。

「悪い。鏡、無いかな」

彼はグローブをはめた手で催促した。

水女は机上のポーチから手鏡を取り出して放った。

それを受け取り、自分を映す。

「誰だコレ」

「アナタでしょ」

いやまあその通りなのだが、昆虫を模したマスクを被った人間が鏡に映っていて、それが自分だと瞬間的に分かる者は少ないだろう。

「アナタ、妖怪じゃないの？」

「人間…だと思う」

「思っつてどういふこと」

彼は自分の腹部に目を落とす。

黒いライダースーツに、妙な機械の付いたベルトが巻き付けられている。

巻き付けられている、というか、自分の身体の一部のような気がした。

「多分俺は機械で出来てる」

「機械？」

何故か水女が目を輝かせた。
身を乗り出し、彼に顔を近付ける。

「何らかの装置を使ってその姿になってるってこと？」

「そんなモンだ」

「凄いなあ！外の技術はそんなに進んでいたんだね！」

「外？」

「山より下の村とかのこと。そっちから来たんでしょ？」

「いや、生憎。気付いたら森にいた」

て言うか、ここは山だったのか。

「気付いたら？…記憶喪失ってコト？」

「いや、確かそれ以前は……」

以前は……

何をしていたんだろう？

思い出せない。

森にいた以前の事が。

「……」

「やっぱり記憶喪失だ。ね、アナタを誰が造ったのかも覚えてないの？」

「おう」

そっか……と水女は顎に手を当て、何やら考え込んでいる。

ああでもない、こうでもないとブツブツ呟いた後、思い立ったように彼の肩を掴んだ。

「よし！アナタ、ここに住まない？」

「？意味分かんない」

「私がアナタに寢床を提供するってこと」

「え、マジで？それは嬉しいけど」

このまま彼が山に放り出されると、幾ら彼に強化された肉体があったとして、餓えや住まいの問題は回避出来ない。
それを保証してくれると言うのだから、願ったり叶ったりだろう。

「何か条件があるんだろ」

「察しがいいね。そうだよ」

「金は無いよ」

違う違う、とクスクス笑って、女は続けた。

「調べさせて！アナタの身体を上から下まで、全部調べさせて！それが条件」

と、スパナやドリルを構えて涎を垂らす女。

その淀んだ目の輝きは、彼の決断を鈍らせるのには十分だった。

「いやあの、もう少し考えさせて……」

「お願い！ほら、私がか…調査したら、記憶のことも何か分かるかもしれないよ？」

「今分解って言おうとしたよな？」

しかし、身柄を預かってもらえばメリットがあるのは確かだ。

まだ殺されると決まった訳ではない以上、自分さえ気をつけていれば良いだけ。

それに、記憶の事もある。

要求を呑むのか、呑まないのか。

「ね、お願いだからさー」

「……あー。分かった、分かったよ！その代わり、俺に説明書なんかねえぞ」

「やったーっ！大丈夫だよ。悪いようにはしないからね！」

ぴょんぴょん飛び跳ねて喜びを表す女。

簡単に返事をしてしまったものの、事の重大性を彼は理解していた。うっかり身体を壊されてしまう、なんて事になつてはシャレにならない。

何としてもそれだけは阻止する。

「じゃあ自己紹介ね。私は河城にとり。にとりで良いよ」

「よろしく、にとり」

水女、にとりから差し出された手を握る。

「俺は……俺は……」

しまった。

名前が思い浮かばない。

何か頭に残っている単語で……。

「ゴウガシャ。恒河紗で頼む」

「分かった。よろしく、恒河紗！」

にとりも恒河紗の手を握り返す。
彼の住まいが決定した。

森林（後書き）

いきなり仮面ライダーでビックリされている方多いのでは。

山（前書き）

キャラ崩壊が著しいですね。

我慢して頂いてる方は凄いですよ。

山

恒河紗がにとりと生活する事にして3日経った。
彼は記憶を失っているものの、一般的な知識は持っているようだった。

何度が変身を強要され、それに応えたものの、にとりはそれ以上の事はしなかった。

彼女は何か機械をいじったり、発明をするのが好きなようで、恒河紗によく力仕事を依頼する。

どこからか注文した山積み of 機材を恒河紗に運ばせるのだ。
恒河紗にとっては結構充実した毎日。

3日間で、恒河紗は様々な事をにとりから聞いた。

ここには（この世界には）妖怪や神といった種族が存在しており、にとりが住んでいる山は妖怪に溢れているという。
初めに恒河紗を襲った化物もその類らしい。

聞けば、にとりも妖怪だという。

「河童だよ。私は河童」

「カッパあ？」

頭に皿載せたヤツ？と恒河紗が聞くと、そうそう、にとりはクスクス笑った。

「私は他の妖怪達とは違って、人間は盟友だと思ってるよ」

「食べないのか？」

「食べないよー」

こうして恒河紗と話している間も、にとりは作業台の上で創作活動に勤しんでいる。

1つ1つパーツを作り、組み上げて何かを作ろうとしていた。台上にも、大小様々なパーツが山積みになっている。

「それ何だ？そろそろ教えてくれよ」

「まだまだ。これが出来てから恒河紗の調査を本格的に開始するかだね」

なんてことだ。恒河紗は身震いした。

まだ自分はにとりの本気など見ちゃいなかったのだ。となるととりが作っているのは何だろうか。

プラズマ砲？超音速振動メス？核？

いずれにしても嫌な予感しかない。

「夕方には多分出来上がるよ。散歩でもして待ってて」

死刑執行まであと半日。

いっそ装置を壊してしまおうか。

「……お手柔らかに」

何だか良く分からない捨て台詞と共に、恒河紗は散歩に出かけた。
半日何をしよう。
助けを求めようか。

にとりの家を出ると、基本的に木しかない。

殆どどこに行っても同じ景色が続く、ある種の狂気すら芽生えてきそうな程退屈だ。

それでも新たな場所を開拓しようとする、必然的に山奥まで進む形となる。

やはり同じ景色しか続かなかったが、恒河紗は足を止めて空を見た。鳥が優雅に空を滑空するのを見て、彼は心底羨ましく思う。

何が言いたいかと言うと、

「迷った！」

ああ困ったぞ！と恒河紗は不必要に大声で叫ぶ。
途中からおかしいなとは思っていたのだ。
だから来た道を真っ直ぐ戻って来たつもりだったが、いつの間にか
良く分からなくなっていた。

道を聞く相手もない。

助けを求めようにも、家が見当たらない。
にとりは期待出来ない。

「どうしよう……」

空でも飛べたらすぐ帰れるのに。

と、焦燥感を宥めるように鳥を眺める。

鳥はいくつかの群れが恒河紗の真上を旋回し続けていた。

バサバサと羽音がこちらまで聞こえてくる。

そのうちの1羽が群れを離れ、妙な動きでジワジワと高度を落とし
てきた。

恒河紗は首を傾げる。

――どう見てもこちらへ向かって来ている。

眺めるうちに鳥が不自然にブレたかと思ったら、鳥はその姿を消していた。

「消えた」

彼は率直な感想を漏らした。
すると背後から、

「こっちですよ」

言葉と剣が飛び出した。

原始的な生物の生存本能に従って恒河紗の身体が動く。
首を撫でるように引かれた剣を、全力でしゃがんで回避する。
そのまま転がって相手から距離をとろうとした彼の目の前に、
又しても剣が突き出される。

「速いわ！ちょっと待てや！」

襲撃者と恒河紗が激しく暴れるため、辺りに土煙が立ち上る。
2つの影が何度も交差した。

「嫌ですよ。逃げちゃうでしょ！」

「否定はしない！」

ぞん、と襲撃者の剣が恒河紗の肩を捉えた。

加えて肩と腕とを分断するために剣に力が込められる。

「…痛つてえ」

赤い複眼が2つ光る。

土煙から緑色の仮面が覗いた。

それでも肩は落とされない。

剣が刺さってすらない。

黒いライダースーツに刃を阻まれた襲撃者の動揺は計り知れないものだっただろう。

だからこそ、一瞬の隙が生まれた。

それは恒河紗が反撃するのに充分なもので、彼のベルトの風車が激しく回転する。

ブォン、とモーターが唸った。

しゃがんだ状態から飛び上がるように放った拳は、襲撃者の顎を正確に捉えた。

かつて犬頭の化物を沈黙させた拳は、垂直に衝撃を叩き込む。

「!？」

しかし、襲撃者は倒れない。

元々の耐久力もあるが、ヒットした瞬間に上体を強引に退き、パンチの威力を殺していた。
とんでもないスピード。

一瞬で恒河紗の背後に回り込んだ事と言い、襲撃者は俊敏さに秀でていた。

「……何者ですか、貴方？人間ではなさそうですね」

「一方的に攻撃しておいて人外呼ばわりかコルア。こっちからすればアンタの方がよっぽど妖怪じみてる」

土煙の陰はやれやれと肩をすくめる。
少し小馬鹿にした態度だった。

「『じみてる』？この山で何を言ってるんですか。私は妖怪、鴉天狗の射命丸 文ですよ」

さらさらと煙が晴れる。

恒河紗の目の前に立つ襲撃者は、彼の顎程の背丈の女だった。

大きく丸い瞳に、肩ほどで切りそろえられた黒髪。
ただ一目で人間ではないと分かる理由は、その背から伸びる真っ黒な羽だった。

「胸を張つてるとこ悪いんだが、お前なんか知らんぞ」

割と名の知れた妖怪なのだろう、文は目に見えて不機嫌になった。
華奢な体に似合わない巨大な羽を一層大きく広げ、ふわりと空中に浮かぶ。

「ここは私達鴉天狗の縄張り。貴方がここに来た以上、黙って返す訳にはいきませんよ」

ニヤリと文が唇を歪める。

「えー……。道に迷っただけなんですけど」

「道に迷ってこんな山奥に？……貴方、どこから来たんですか？」

「なんかあの…滝の方の。河童！そう、河童の家」

文は急に驚いた顔になった。

腕を組んで恒河紗を見下ろし、確認するような口を開く。

「河童って……にとりの事ですか？」

「何だ知り合いか。そうだよ。河城にとり」

恒河紗の安心した笑顔を見ても、文は不審そうな顔をしていた。
巨大な羽を休みなく動かしながら、値踏みするように恒河紗を眺める。

「うーん……にとりの友人なら助けてあげたいものですが、にとりの名を語っていいだけの可能性も……うーん」

「あの一、どうしました？」

よし、こうしよう！と文は恒河紗の鼻先に指を突き出した。

「勝負をしましょう。私の翼から羽を1本でも引き抜けば貴方の勝ち、貴方が死んだら私の勝ちです」

「よっしゃー乗った！ってバカ！俺リスク高すぎだろが！俺の命は何グラムだボケ！」

「別に私を殺しても良いですけど。その代わりにとりの家までの案内は誰がするんですかね？」

「俺が死ななきゃならん理由にはならん」

「縄張りに侵入したのに？」

「う……ぬぬ」

何だか最近、選択の連続だと恒河紗は思う。
意地悪っぽく笑った文は、ジワジワと上昇しながら声を恒河紗に落とす。

「鴉天狗を認めさせるには力を示すのみですよ。では、行きます！」

瞬間、文の姿が消える。

『消えた』と思った瞬間、恒河紗は背中に衝撃を受け、前方に吹っ飛ばされた。

樹木に叩きつけられたと思えば、空中に放り出される。

2つの複眼は僅かに黒い影を捉えてはいるものの、いかんせん速すぎて人型とも判別出来ない。

「頑丈ですね！どれだけ持ちますかね！？」

文は空中に投げられた恒河紗を、お手玉のように剣で斬りつける。
ギン、ギン、と鈍い音と火花が散り、恒河紗は空中に浮いたまま為す術が無かった。

（クソッ、速すぎて何されてるかも分からん！何か身体から嫌な音がするし、このままだと本当に死ぬかも…）

（……………音？）

ギン、と一際強い一撃が見舞われ、恒河紗はくるくると回って上に弾かれた。

耳を澄ますと、バサバサと羽音が遠ざかって行く。

（そうだ、なにも目で捉える必要はない。羽音の最高値で手を伸ばせば、タイミングは合うはずだ！）

そうと分かると、恒河紗は全てを投げ出し、聴覚のみに集中する。
木々のさざめき、身体が空を切る音、そして、僅かな羽音。

バサバサという音が、こちらに迫って来る。
音は背後からする。

恒河紗は弾かれたように腕を突き出す。

「クツ……ハズレ、だ……」

手が何かを掠った感覚は確かにあったが、手のひらには何も無かった。

尚も攻撃は続く。

ギン、と剣が背中を打った。

「ぐ、ああ！」

背中に痛みが迸った。

ビクンと身体が跳ねる。

とうとう身体に傷がつき始めたようだった。

複眼が背中から流れる血液を確認する。

激しい攻撃にライダースーツは裂け、内包されていた機械群が露出していた。

（チンタラしてられねえ……！）

再び精神を集中する。

全ての神経を遮断し、聴覚だけ残す。

聞く。

聴く。

音のみで、全ての動きを把握する。

溢れた音の中から、羽音だけを掬い上げる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……ここだッ！」

ドスン、と恒河紗の手に何かがぶつかる。
それは彼から急いで離れようとしたが、彼の手は力一杯握りしめていたため不可能だった。

「あやややや！痛い、痛いですってば！」

「どうだ！」

文は翼の根元をしっかりと掴まれ、脚をじたばたと動かしている。
一方恒河紗は背中から血を噴き出しているにも関わらず、無表情の仮面の上からでも歓喜の興奮がありありと見てとれた。

「むむむ…まさか私が負けるとは……」

「アンタの武器は速さだけだったからな。来る場所さえ分かればこうなるさ」

ぶち、と羽を一枚抜き取る。

「約束、守ってもらっぜ」

分かってますよ、と文は悪態をつく。

「それより、聞かせてもらって良いですか？」

「ん？」

「貴方って、人間なんですか？」

恒河紗は少し考えて、

「んー。それはこれから分かるかも」

「お帰りー。って何で文？」

「いやー色々ありまして」

恒河は文の肩に担がれて帰宅した。

背中からの出血が夥しく、簡単な止血の後運んでもらったのだ。

変身は既に解いており、若干蒼くなった顔は疲労で緩みきっていた。

「ボロボロじゃん！どうしたの!？」

「それも色々ありまして」

「散歩に行ってたんじゃないの？」

にとりが小さな手で恒河紗の傷口をペタペタ触る。

「いまだ。痛い、にとり」

「あつ、と、ごめん。じゃ、さっさと調査しちゃうか」

いそいそと部屋の奥に消えて行くにとり。

恐らく謎の機械の御披露目となる事だろう。

恒河紗は文のシャツの裾を握り締め、

「……一緒にいて下さい」

「はいはい」

山（後書き）

音だけで捉えられる訳ねーだろ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655s/>

東方改造論

2011年10月8日13時49分発行